

水上の貨物輸送の手足

— 舢（はしけ） —

■ 水上の貨物輸送の手足となる舢

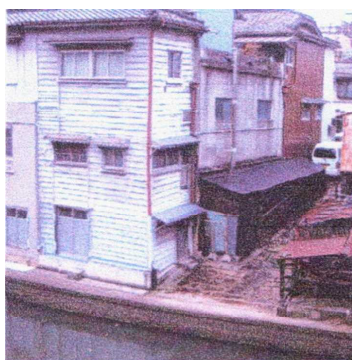
舢は河川や運河などの内陸水路や浅い海で貨物を運ぶために作られた船である。推進器を持たないため、タグボートに曳かれて航行している。港湾内の輸送で重い貨物を輸送することができる手足となる船。舢は推進器を持たない分、船体の大部分を荷物室にでき、積載量を多くでき、効率的に貨物を運ぶことができる。一隻のタグボートで一度に何隻もの舢を曳航できる（えいこう）ので、輸送効率が高く、電力を使わないので省エネの面で優れていた。積荷は石炭をはじめ、羊毛、綿花、食料、豆板など雑貨、陶磁器などである。名古屋港でも舢の利用状況は、1950年代は60～45%で年々低下している。舢のことを「尾張ダンベイ」とも呼ばれ、50～80トンの木造船を堀川べりで造られていた。

■ 舢は水上生活者の居住と仕事場

舢輸送は、本船の入出に合わせて荷役を輸送するため、早朝や深夜になることもある。何日も家に帰れないこともある。自宅から舢に通勤するより、仕事と住居を一致させ舢で船内居住する方が合理的であった。舢には船尾に船室（3畳程）が造られて、水上生活ができるようになっている。1921（大正10）年には、堀川・新堀川に舢が450隻あり、飲料水を確保する給水栓を堀川口船溜まりに設置されていた。戦後、中川運河船溜を「水面町」と呼ばれ2000世帯が舢で暮らしていた。

■ 自由に勉強し遊べる水上児童寮

舢で生活する幼児の水難事故は毎年繰り返された。舢からの通学の難しいことから1934（昭和9）年築地保育園に夜間託児所が併設され、水上生活者の子どもを預かるようになった。船頭からの請願で同17年には名古屋市水上児童寮が開設された。子どもたちは狭い船室にいるより、広々とした寮で友達とあ



舢の人たちが利用した共同浴場「弁慶湯」

写真：堀川まちづくりの会企画展

べられまわれることに期待した。戦後1948（同23）年に再開し、同25年4月水上児童寮が独立した。50～70名の児童が入寮していた。同45年に廃止された。

■ 水上生活者の入浴施設「弁慶湯」

舢には風呂の設備がないので、堀川を通航する舢の人たちは、五条橋の共同荷揚場に舟を係留して円頓寺商店街で買い物をし、弁慶湯で入浴を楽しまれたとのこと。



中川口開門の舢溜 提供 名古屋港管理組合



曳かれる舢 提供 名古屋港管理組合



舢で生活する家族 提供 名古屋港管理組合

（大橋公雄）